①　毎月1回25日発行　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第19巻　第7号　1974年7月25日　大町山岳博物館

ゴゼンタチバナ　撮影 斉藤忠彦

村と「郷土館」
―小谷村民俗資料館―

明治二十二年町村制施行により当時の千国村と中小谷村が合併して旧南小谷村ができたものでありますが、その時民家を移転改造し役場として使用してきたのが小谷村の前の役場の建物でありました。

従ってあの茅葺屋根は町村制施行以来八十余年の小谷の歴史の一部を物語るものでありますし、茅葺民家が年々消えて行く現況の中で将来必ず貴重なものになると言われるようになりました。また、長い年月村造りの中心になってきた役場の建物を何とかして保存できないかとの声も村内で聞くようになったのでありますが、保存には相当の経費もかかるので、その処置に迷っておりました。

ところで当小谷村では昔からその時代〳〵に住民生活に使われた用具類が時の流れと共に失われてゆくことを憂えて、既に村条例を制定し文化財保護委員会を設置してこれら用具類の保存をはかり併せて民俗資料として集めていましたが、これを早く整理して保存策をたてることを迫られていました。また一方、村では村造りの手段として自然休養村の制度をとり入れ、目下休養村としての地域づくりの事業も進めております。

このような事情の中で過去を保存し、なおこれからの村造りに更に役立つために「小谷村民俗資料館」として、また「小谷村休養村メインセンター」として旧役場庁舎を再び世に出すことにしたのであります。

この資料館「郷土館」は屋根を茅で葺き替え、昔のたたずまいを保ちながら中には民具その他の資料を陳列する設備も整え、この春から開館しましたところ、観光ルートなどにものり、早速少しずつその役割を果しているのであります。

この「郷土館」が将来の村造りを担う若者達の心の支えとなり、また小谷村を訪れる多くの人々に我が村を紹介し、山深い小谷が広い社会との交りの絆を一層強くするのに大きく貢献するであろうことを期待するものであります。

（小谷村長　斎藤鹿人）

山岳遭難の状況

――北アルプス北部――

岸田健二

古い記録によれば、北アルプス北部（大町警察署管内）の遭難は、昭和二十五年に鹿島槍ケ岳で、雪崩によって四名が死亡したとの記載が第一号である。地元の人達の話によれば、もっと昔から山岳における遭難はあったようであるが、これ以前の記録は当署には残っていない。

その後、海外登山の成功などによって、登山ブームが訪れ、山岳遭難も増加の傾向をたどり、大きな社会問題となっている。（別表1山岳遭難の推移のとおり）

山岳を管轄する地元警察署へ遭難発生の連絡がされる。それは工事用の電話、下山者からの伝言、トランシーバーを通じてなどさまざまの方法でなされ、我々は一年に何回となく遭難の事実を知らされるのである。そして、そのたびに家族への連絡から救助体制作りに追われる。家族への第一報連絡のときなど、電話のむこうで、母や、父や、兄弟の声がとぎれる。そのショックの大きさ、悲しみは電話を通じて伝わってくるが、事実は正確に伝え、事故の体制の万全を期さなければならない。

自然を愛し、山を友とした岳人が山で死ぬことは本望だと言う人もいるが、我々は否と答える。自然は、生活にうるおいをもたせ、心の広がりを与えるものであり、決して悲しみを生ませるものではないからである。

登山者のため、安全登山のために、地元ではいろいろな体制を確立し、山岳遭難事故防止に努めている。

一、補導所の開設と登山者カード

北ア北部では、各シーズンごとに、管内六カ所に補導所を開設し登山者からの相談に応じている。

これは北ア北部遭対協補導員に委嘱された山の経験豊富な四十五名の人達で構成されており、これらの人達は山の状況に詳しく、たえず新しい情報を入手して、登山者の安全のために助言してくれるのである。

しかしながら、最近の登山者の一部には（特に夏山シーズン）、聞くことが恥でもあるかのように、補導所を利用してくれない人がいる。楽しい山行にするためには、登山道の状況、残雪の状況等の注意を要する場所の情報を入手して登山することが大切で、出発点における心得だと思う。

夏山では未組織の登山者が多く、また、ハイキングの延長のように気軽に、無計画に登山する人が目立っている。三千メートル級の山岳では、真夏に凍死するケースもあるので、是非とも登山口の補導所で登山者カードに記入しながら、最新の山岳情報を入手するようにしてほしい。

家族や勤務先へ具体的な登山計画を話してないために「北アルプスに登山すると言って家を出たが、至急用件があるので連絡して下さい」というような依頼を受けることがある。北アルプスと言っても広く、何万人もの登山者が入るシーズンには捜しようもないが、登山者カードが提出されていれば、そのカードによって予想されるコースの山小屋や稜線をパトロールしている常駐隊員に電話、あるいは無線を通じて手配して連絡する方法もとれる。万一、遭難したり道に迷って、下山日に帰宅できないときなどは、この登山者カードが唯一の手がかりとなるものである。登山者は、安全登山のキップと心得て、補導所で登山者カードへ記入し、最新の山岳情報を入手して入山するようにしてほしい。各登山口の補導員はそれを待っている。

二、救助活動とヘリコプター

北ア北部遭対協救助隊員は、福島忠雄隊長以下九十四名で組織されている。

遭難発生の連絡があると各班（大町班、白馬班、小谷班）に出動要請を行ない、発生場所、発生時間、コース、事故の状況等を検討して救助隊を編成する訳である。これらの救助隊員は生業を持ち、要請によってそれぞれの職場から人命救助のため集まってくれる人達である。ベテランぞろいであるが、万に一つの失敗も許されない危険な作業に従事するため、年に二、三回は救助隊員の救助技術訓練を実施し、万全を期している。

出動要請があったからといって、危険な救助活動に喜んで出動する訳ではない。むしろ腹立たしさを感じてはいるが、救いを求めている遭難者のために、あえて危険を犯して出動し、人命を救助するといった崇高な精神からの活動である。登山者自身もアクシデント発生の場合を考えて、体制づくりをしてから入山するなど、登山計画に遭難対策を組入れて登山する必要がある。

積雪期には、特に危険と困難が伴なうことから、指定危険地区を設定し、安全登山を呼びかけている。北ア北部では北鎌尾根、鹿島槍ケ岳～五竜岳一帯、唐松岳～不帰一帯、白馬岳主稜の山域であり、この山域への登山者は、それぞれの山岳会で救助体制を確立し、一時的な救助活動をすることなど、登山者自身の責任体制を求めている。

遭難が発生すれば、なんでもかんでも地元に救助依頼をすると言うのでなく、登山者自身の責任として処置すべき体制が必要であろう。

今年の五月連休期には、届出から病院収容まで四時間という迅速な救助活動を実施した。これはヘリコプターの活動によるものである。

長野県下における昭和四十八年中の山岳遭難に対するヘリコプターの出動状況は三十一件で、負傷者救出二十一名、病気救出六名、遺体収容二名、捜索活動六件となっており、スピーディーな救助活動に大きな成果をあげている。人力ではとても近づくことが危険である場所、負傷者の収容に日数がかかり早く病

山岳遭難の推移（49.6.30 現在）

内訳＼年別	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	計
件数	1	7	1	5	2	6	6	13	19	24	21	24	33	33	11	28	29	28	44	34	28	41	34	28	22	522
死者	4	8	1	11	3	7	5	11	16	23	12	8	29	13	8	17	14	17	18	21	13	17	14	10	21	321
負傷者		1				3	5	6	13	10	12	17	12	26	2	22	17	16	36	28	24	28	19	18	13	328
無事救出				1		3			3	4	3	9	12	22	1		5	5	8	15	5	7	4	6	3	116
遭難者計	4	9	1	12	3	13	10	17	32	37	27	34	53	61	11	39	36	38	62	64	42	52	37	34	37	765

院へ収容しなければ生命に危険がある場合、広域にわたって捜索する場合などには、抜群の威力を発揮する。

迅速な救助活動を進める上でヘリコプターは切り離して考えることはできない。しかし、昨年一件平均のヘリコプター使用料金は四十一万三千六百二十三円と、ちょっとした不注意が高価なものについている。

三、遭難事例から見た教訓

一、ベースキャンプ選定とコースの選定

T山岳会では、厳冬期の穂高を目標に七名パーティーで行動し、横尾本谷出合にベースキャンプを設置したところ、長さ三キロ余にわたる大雪崩が発生し、全員が雪崩に流され、遭難した。（何年か後にM山岳会も同域で同様の遭難をしている。）

雪崩の発生する条件はいろいろあるが、たしかに予測することはむずかしい。しかし、生還した多くの当事者から聞くところによると、いつ雪崩るかと不安をもちながら行動している登山者がほとんどである。T山岳会の場合も谷筋にベースを張り、行動したことが大きなミスであることは疑いない。去年は雪崩がなかったからということはあてにはならない。毎年〈〈山の状況は違うのであるから。斜面に雪が積もれば雪崩れるものと心得、慎重な行動をしてほしい。

二、技術と知識の差が生死を分ける

M山岳会三名とO山岳会二名は、吹雪の五竜岳で行動不能となり、M山岳会の一名が五竜山荘に救援を求めて出発し、残った二名ずつ計四名が雪洞を掘ってビバークすることになった。M山岳会の二名は斜面に横穴を掘ってビバーク、O山岳会二名は平面にタコつぼ形に掘ってビバークした。このため、M山岳会二名は手足の凍傷で三日後に救出され、O山岳会の二名は、日本海側から吹きつける風雪にさらされ凍死体で発見された。（連絡に下った一名は五竜山荘の手前約五百メートルのところで死亡した。）

冬山（北アルプスでは、六月中旬頃まで吹雪に見舞われることがある。）では、荒ると一週間以上も吹雪くこともまれではない。計画どうりに登山ができることは誰もが望むことであるが、季節、コース、山岳の状況に充分対応できるだけの技術、知識、体力を身につけて、自己の技術を過信せず登山することが安全登山につながることであり、生死の分れ目である。自然の摂理は、人間の存在など無に等しくしてしまう。これは、同じ場所で、雪洞の設置の技術や経験の差が生死を分けてしまった事例である。

三、思いつき登山

関西の女性二名は、上高地に遊びにきて、西穂高岳への登山を思いつき、西穂高山荘へ到着し、帰路下山道を見誤り焼岳方向への登山道をたどり、路みあとを間違えて深い熊笹の中に迷いこんでしまった。山中をさまようこと十日間、上高地とは反対側の岐阜県側で発見されたものである。

山の天気は変りやすい。今まで見えていた山の頂が、フッと消えてしまうことはいつものことである。登山するには、コース経験者と一緒に行動することが望ましいが、未経験のときは、コースタイム、山岳の状況、日程、装備などを充分に研究してから登るべきである。無計画な思いつき登山など無謀であり、危険この上もない。上高地のハイキングの延長登山が遭難につながったものであり、奇蹟の生還などと英雄視されることなく、教訓として、多くのハイカー登山者に慎重な行動を望みたい。

四、コース経験とビバーク

埼玉県の兄弟二名は、鑓温泉～白馬岳～猿倉のコースの登山を計画した。二人とも北アルプスへの登山は初めてであり、コースについては地図をたよりの登山であった。

白馬鑓の稜線に出たのは午後三時ごろ、天候が悪化のきざしを見せ、視界が悪かったが、計画どうり白馬岳に向って行動を続けた。丸山地籍に至り、弟が疲労と寒さのためけいれんを起こし行動不能となったため、兄は今朝方通過した鑓温泉小屋へ救援を求めに下山したが、この間に弟は凍死した。平地では暑い六月二十八日のことである。

この遭難を扱って疑問に思ったのは、なぜ丸山のすぐ近くにある頂上宿舎へ救援を求めず、四時間余も離れた鑓温泉小屋へ向ったかということである。これは、コース経験がなく、また視界が悪かったため、すぐ近くの山小屋を知ることができなかったためであり、コースの研究と経験不足が大きな事故へつながったものである。さらに救助活動に従事した隊員の報告によれば、ザックの中の食料、燃料を使用した形跡がないとのことであり、体力、気力の限度まで行動し、凍死に至ったものと思われる。ビバークは、もっと体力や気力に余裕のあるうちに行ない、次の行動に備えるものであるから、自分の現在地がわからなくなった時などはむやみに行動することなく、早めにビバーク体制に入ることが必要と思う。この事例は、未組織登山者や経験の浅い登山者が多い夏山の教訓として受けとめ、登山口や稜線パトロールの補導に万全を期したい。

登山は、登山計画の段階、あるいはトレーニングの段階からはじまっていると思う。山岳遭難をなくするためには、コースの研究など慎重な計画と装備や食料の知識、技術を充分学ばなければならない。多くの遭難事故がこの重要性を教えている。

ときおり警察の窓口や電話で登山者から山岳の状況等について相談を受けることがある。そんなときはいつも最後に「山は逃げていかない、あなたはまた来ることができるのだから」とつけ加える。山と言えば山岳遭難を連想することのないような北アルプスにしたいものと思っている。

（大町警察署外勤課主任）

山岳別発生状況（昭25～49.6.30）

内訳＼山岳別	白馬三山	唐松岳	五竜岳	八峰キレット	鹿島・爺ケ岳	裏銀コース	槍ケ岳	針ノ木岳	白馬岳以北	硫黄岳	鉞鬼岳周辺	その他	計
件数	102	67	51	16	109	40	65	18	18	5	3	28	522
死者	56	36	27	12	82	16	42	7	10	10	1	22	321
負傷者	79	42	37	5	63	22	30	14	13	4	2	17	328
無事救出	23	18	17	1	31	10	7	1	4			4	116
遭難者計	158	96	81	18	176	48	79	22	27	14	3	43	765

原因別発生状況（昭25～49.6.30）

	転滑落 岩登り中	縦走路など	なだれ	落石	道に迷い	病気	落雷	疲労凍死傷	徒渉失敗	その他	不明	計
件数	15	248	37	32	11	24	4	88	7	27	29	522
死者	13	87	60	11		2	3	91	8	5	41	321
負傷者	10	180	35	28	1		2	46	2	23	1	328
無事救出		6	5		17	23		22		43		116
遭難者計	23	273	100	39	18	25	5	159	10	71	42	765

自然観察会について

新井二郎

ちょうど十年前の夏、大学一年生だった私は、都心に住む中学生たちと北アルプスの自然の中にいた。「自由な、ありのままの目で自然を見、自然に接する」という考えのもとに、大町山岳博物館の人たちと一緒に私たち野外研究同好会の学生が、自然に接する機会の少ない都会の子たちにとにかく自然に触れさせようとして行った「山の自然科学教室」（科教）である。この「科教」はそれよりもさらに七年前の昭和三十二年に始まったものである。緑多い東京西部の農村で育ち「自然」などと別に意識もせず無関心であった私が、この「科教」で北アルプスという大自然に触れた感激は、中学生以上であったと思う。とにかく自然を見、接することから無意識であった「自然」というものを意識するようになったのは確かである。そして北アルプスのような所でなければ、と考えていた「自然」を意外と身近な所にも見つけられることにも気がついた。たまたま大学の同級生に、中学生のときこの「科教」に参加した者がいたが、彼は「参加後すぐではないが、ある時から急に山が、自然が好きになった。科教が一つのきっかけだったと思う。」と話している。私には、自然観察会等による自然に接する行動が、自然を意識し、目を向け、自然を愛する大きなきっかけの一つであると考えている。

ところで最近は、自然というものに対する関心が高まり、各地で「自然観察会」とか「自然教室」といった催しが行われている。一口に「自然観察会」といっても、その形式・内容はいろいろあるだろうし、私にはこうであるとはいえないので、ここでは、私の勤務している博物館で行っているものを取上げて、その中でいくつか考えてみようと思う。現在行っているのは次の三つで、それぞれ四季に一回づつある。

①高尾自然教室――小学生（四年生以上）を対象とするもので、自然に接する機会の少ない子供たちを自然に親しませようと行っている。これには野外研の学生約30名が指導者として協力している。少人数の班に分かれ、雑木林を中心とする山や沢を各班自由に行動する。自然について教えるというより自然を体で感じさせることをまず考えている。その点年令差の少ない学生たちに子供たちも親しんで、効果的である。

観察ポイントでの解説

付添いの父兄は別に班をもうける。これはいわれる教育ママから子供を離し、自由に行動させたいためである。

②成人自然教室――大人を対象とするもので、雑木林の丘陵地、自然研究路のある自然林などを使い、その季節の自然をコースに沿って観察する。まず自然に親しむことが中心となる。最近は若者から老人までこのような機会を求める人たちが増えている。

③自然観察会――自然の中のある特定なもの（例えばスミレ類・水生昆虫など）をテーマにして、その生態や分類についてある程度専門的な観察・研究を行う。このため対象は中学生以上とし、講師もテーマにあった人を選び、人員・場所などもテーマに応じたものとする。最初にテーマが決っているので、それに興味を持つ者が申込み、かなり突込んだ内容の観察が行えるが、事前に参加者の要求程度がわからないために初心者向と上級者向といったグループ分けにすることが多い。

以上三つのいわゆる自然観察会は、それぞれの観察内容の程度の違いはあるが、自然に接し、自然を知ろうとする目的では同じである。会によっては自然保護を目的とするものもあろう。会の目的にあった方法を十分に考える必要がある。

また指導者と参加者の数も重要なことである。希望者全員を参加させることが一番良いのだろうが、いろいろな点から私たちの行事では人数を制限している。①は小学生八十名②は大人百名、③は中学生以上三十～四十名である。野外で行動する場合、多くは長い列が出来やすい。こうなると講師が前で説明したことが、後の方では何について何んといっているのかわからず、ただ立ちどまるだけになってしまう。これをさけるために参加者を少人数のグループに分け、指導者もそれぞれのグループにつける。私は、指導者一人に参加者最高十五人が限度だと思っている。こうして、途中何個所かをまとめをするための集合地点とし、それ以外は各グループ自由に行動することも有効である。小学生を対象とする高尾自然教室では、グループごとにかなり異なったコースをとり、またやぶこぎや木登りなどの行動も含まれているので、一グループを小学生五名学生二名程度にしている。一列になって観察して行くにしても、小学生だと十人に一人の指導者は必要だと考える。指導者は出来る限り、観察地域に詳しい人が良い。よそからえらい学者先生方を引張ってくるよりも地元の先生など、その地域の自然を愛し、研究し、コースでの観察ポイントをよくつかんで、またわかりやすく説明する人たちにお願いしている。

以上、参加者と指導者のことにしかふれなかったが、この他、自然観察会を行う場所について（コースと時間・観察ポイント・休憩場所・危険個所など）の検討、観察の対象と指導法などいろいろな問題がある。さらに採集の可否や自然保護問題などについて、指導者側が前もってよく考えておかなければならないこともある。

ところで自然観察会の効果であるが、正直なところ私にも十分にわかっていない。自然観察会は参加者にとって自然に接し、親しみ学ぶため一つの機会であり、きっかけである。自然を愛する気持は潜在的にだれもが持っているものだと私には思える。すぐにあらわれなくても、自然観察会が自然を愛する気持を引きだす一つのきっかけになれば効果はあったことになる。

（東京都高尾自然科学博物館学芸員）

山と博物館 第19巻 第7号
一九七四年 七月二十五日発行
発行所 長野県大町市TEL②〇二一一 大町山岳博物館
印刷所 大町市下仲町 大糸タイムス印刷部
定価 年額 四〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一三、二九三）